

# 青年期自閉スペクトラム症の女性にとっての 社会的カモフラージュの功罪

— 『ガールの集い』参加者の座談会を通して—

岩男 芙美<sup>\*1</sup>・木谷 秀勝・豊丹生啓子<sup>\*2</sup>・土橋 悠加<sup>\*2</sup>  
牛見明日香<sup>\*3</sup>・飯田 潤子<sup>\*2</sup>・藤井 寛子<sup>\*4</sup>・森 久美子<sup>\*4</sup>

Some Merits and Demerits of Social Camouflaging with Female Autism Spectrum Disorder at  
Adolescence Told through Round-table Discussion

IWAO Fumi<sup>\*1</sup>, KIYA Hidekatsu, BUNYU Keiko<sup>\*2</sup>, TSUCHIHASHI Yuka<sup>\*2</sup>, USHIMI Asuka<sup>\*3</sup>, IIDA Junko<sup>\*2</sup>,  
FUJII Hiroko<sup>\*4</sup>, MORI Kumiko<sup>\*4</sup>

(Received December 15, 2021)

キーワード：女性の自閉スペクトラム症、社会的カモフラージュ、レジリエンス

## 1. 問題と目的

近年注目されている女の子・女性の自閉スペクトラム症（以下、女性ASD）の研究において、海外ではCamouflage行動（以下、カモフラージュ）が注目されている（Head et al., 2014, Mandy, 2019, Hull et al., 2020）。このカモフラージュに関して、海外では“camouflage”や“Camouflaging”がしばしば使用されているが、日本語では「カモフラージュ」で総称されることが多い。合わせて、カモフラージュが、社会的文脈で生じる問題であることから、“Social camouflaging”が使用されている（Hull et al., 2019, Mandy et al., 2012, Schneid & Raz, 2020）。したがって、本論でも、“Social camouflaging”（以下、社会的カモフラージュ）を、「ある社会的状況で自閉的特性をできるだけ目立たないようにするために、明らかに学習された、あるいは暗黙理に身に付けた、意識的又は無意識な方略を使用すること」（Hull et al., 2019）と定義する。

社会的カモフラージュ傾向の高い女性ASDに生じる独特な苦悩に関して、成人後にアスペルガー障害の診断（現在ではASDの診断となる）を受けたWilley（1999/2002）は、次のように述べている。「（社会に出て）その場その場の状況に応じて、自分本来の姿はなるべく隠さなくてはならないことは理解していた」、一方で、「（大学時代）ヒトとのつき合い方を学ぶのは、勉強と同じだった。外国語を学ぶのと同様、研究し、観察しなければならないのだから」。このように、女性ASDの場合、特に対人関係が大きく変化する青年期（思春期を含む）において、カモフラージュは、「普通の人の振り」（Willey）という（過剰な場合を含めて）適応行動につながる側面を持つと同時に、「自分らしさ」を表現できないことから精神的不調のリスクを高める側面も併せ持っている。つまり、「社会的カモフラージュの功罪」の両側面の理解が重要になってくる。

そこで、今回の報告では、青年期の女性ASDに見られる社会的カモフラージュの功罪について検討することを目的とする。その研究方法としては、Bargielaら（2016）やHullら（2017）と同様に、女性ASD当事者のナラティブを質的分析するアプローチを行なう。

## 2. 方法

\*1 中村学園大学（令和3年度山口大学教育学部附属教育実践総合センター共同研究者） \*2 なかにわメンタルクリニック  
\*3 弁護士法人牛見総合法律事務所 \*4 かねはら小児科

## 2-1 対象者

今回の研究の対象者は、以下の8名の女性ASD者である。それぞれのプロフィールは表1に示すが、全員専門医からASDの診断と診断告知を受けている女性である。また、全員が青年期の女性ASDの自助グループである「ガールの集い」（木谷・岩男，2019）に表1の「活動への参加歴」の通り参加している女性ASDであり、以下に示す「座談会」にも主体的に参加している。

表1 ガールの集い座談会への参加者

	年代	活動への参加歴
F1	10代	1年目
F2	10代	5年目
F3	10代	5年目
F4	20代	4年目
F5	20代	3年目
F6	20代	5年目
F7	20代	5年目
F8	20代	5年目

\*年代は2021年1月段階

## 2-2 女性ASD当事者の座談会について

女性ASD当事者の座談会は2021年1月の休日の午後に、コロナ禍であったため、当初の対面方式の予定を変更し、オンライン形式で実施した（以下、座談会）。具体的には、以下のとおりの手順で進めている。

### 2-2-1 事前手続

参加者には、自らの考えを事前に考えて、表現をまとめておくことで安心して座談会に参加できるように配慮した。具体的には、座談会実施の1週間前には表2に示すように「座談会の趣旨説明と質問事項」を送付し、当日は全体の話の流れに沿いつつも、内容は大きく変更を行わないようにした。

表2 座談会の趣旨説明と質問事項

#### 座談会「普通ってなんだろう？」の開催要項

今回は座談会「普通ってなんだろう？」への参加希望ありがとうございます。1月初めに連絡したように、「ガールの集い」に参加している発達障害の女性当事者が、毎日の生活・学校・社会の中で苦悩している現状、でも、「自分らしく生きよう」と前向きな姿などを多くの方々に理解してもらうための企画です。

そこで、下記の流れで進めますので、質問内容について、メモ書きなど整理しておいてください。でも、質問以外のことでも、色々な本音をいっぱい聞きたいと考えています。どうぞ、よろしくお願いします。

#### 【質問です】

Q1:「普通」という言葉を聞いて、どんなことを想像しますか？

Q2:皆さんは、自分が他の女の子・女性のように「普通」に見られるような工夫をしてみましたか？

Q3:その結果、心や身体が不調になったり、混乱した経験はありますか？

Q4:みんなに合わせて「普通」に見せるよりも、「自分らしく生きて大丈夫」と思っていますか？

Q5:そのきっかけは何でしょうか？

Q6:これまでの自分の経験から、世間の人達（一見「普通」の人達）に絶対わかってもらいたいことは何でしょうか？

### 2-2-2 倫理的配慮

倫理的配慮として、本人及び保護者に対して、事前に個人情報の保護や記録の方法、記録媒体の管理、中

座の自由、研究成果の公表などについて十分に説明し、書面での同意を得た。また、後述するように、今回はオンラインによるデータ収集を行った。したがって、個人情報の保護として、統括責任者の木谷が大学を通して手続きを行った正式なZOOMアカウントを活用した。参加者全員が、このZOOMの参加手段や途中退室・復帰する方法などを十分に理解した状態でデータ収集を実施した。なお、実際のZOOMの参加方法などを示した資料は木谷ら（2020）をご参照願いたい。

### 2-2-3 座談会実施に際する要配慮事項と展開

座談会は「前半：普通について」、「後半：自分らしく生きることについて」、「まとめとして：世間の人たちに伝えたいメッセージ」の3部構成で進めた。活動時間は視覚情報が過多になるリスクも考えて、3時間を限度とし、カメラオフでの参加も可、さらに前半と後半の間に休憩を挟んだ。

### 2-3 発話分析方法

座談会の会話分析（ナラティブ）にはKH Coder（KH Coder3）を使用した。KH Coderは、樋口（2020）が日本語テキスト型データの分析システムとして作成・公開しているものである。KH Coderは、語の選択にあたり恣意的となる手作業を廃し、多変量解析によってデータ全体を要約・提示できることと、コーディング規則を公開することによって、自由な操作化と客観性の両立を可能にしている。本稿においては、この解析ソフトを用いて座談会参加者による「普通」や「自分らしさ」のとらえ方についての分析を試みた。なお本研究の調査および分析は岩男が中心となっており、木谷らが考察を担当した。

## 3. 結果

### 3-1 座談会の全体的傾向と展開

本座談会の「抽出語総数」は、19,092語であった。また、何種類の語が含まれているかを表す「異なり語」は、1,578語であった。なお分析に先立ち、強制的に抽出する語（以下、強制語）および削除語は表3の通り設定し、事前処理を行った。

表3 強制語と削除語一覧

強制語	削除語
他人	前半
一人	後半
二人	風
自分らしさ	マジ
自分らしく	めちゃくちゃ
少しでも	確か
偏差値	皆さん
多数派	その他 個人が特定される可能性のある語
少数派	

はじめに、座談会の中で話された内容に関する全体的な傾向を把握するため、KH Coderによって抽出語リストを作成した。その結果、頻出150語は表4の通りであった。

「普通」と「自分らしさ」をテーマとした座談会であったため、それらの語の出現回数が多い他、人（他の人）について、周囲に「合わせる」ことについて、自分らしく「生きる」ことについてなどの話題が展開していたことがうかがえる頻出150語リストとなっている。また、参加者名も頻出150語リストに5名分があがっていた。ここから、互いに名前を出し合いながら座談会を展開していたことがわかる。また「笑」が頻出しているが、逐語を起した際に語尾に「笑」がつくことが多かったことを示している。笑顔と笑い声の多い和やかな雰囲気で行われた座談会であった。

表4 座談会における頻出150語のリスト

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	186	F5	12	悪い	7
自分	155	一つ	12	意味	7
人	131	気づく	12	一言	7
普通	98	居場所	12	感覚	7
言う	96	作る	12	経験	7
感じ	64	持つ	12	個性	7
今	52	書く	12	考え	7
自分らしく	50	上手い	12	最近	7
合わせる	42	色々	12	最終	7
生きる	40	発達	12	支援	7
良い	39	本当に	12	社員	7
笑	36	楽	11	場	7
聞く	36	気	11	状態	7
周り	34	好み	11	生き方	7
見る	33	時間	11	絶対	7
好き	31	小学校	11	先	7
話	29	疲れる	11	前	7
違う	25	一人	10	相談	7
考える	24	結局	10	喋る	7
大丈夫	24	嫌	10	怖い	7
分かる	22	嫌う	10	面白い	7
行く	20	杭	10	目	7
高校	18	質問	10	余裕	7
出る	18	就労	10	理解	7
他	18	振り返る	10	理由	7
割	17	想像	10	それぞれ	6
環境	17	相手	10	イメージ	6
多分	17	偏差値	10	オタク	6
工夫	16	勉強	10	グループ	6
人間	16	お願い	9	F8	6
多数派	16	F3	9	一番	6
友達	16	感じる	9	機会	6
学校	15	基準	9	気持ち	6
場面	15	逆	9	擬態	6
大学	15	取る	9	居る	6
中学	15	難しい	9	見える	6
定型	15	配慮	9	五分五分	6
入る	15	変	9	考え方	6
F2	14	話す	9	参加	6
自分らしさ	14	F7	8	子	6
受け入れる	14	見せる	8	社会	6
障害	14	困る	8	女性	6
多い	14	最初	8	少し	6
意見	13	仕事	8	常に	6
頑張る	13	趣味	8	辛い	6
言葉	13	場合	8	打つ	6
出す	13	状況	8	大事	6
変わる	13	大きい	8	当事者	6
無い	13	中学校	8	悩み	6
あと	12	クラス	7	否定	6

(※人名は筆者で改変)

## 3-2 座談会の内容

次に、出現語のうち固有名詞や組織名、人名、地名など個人を特定できる品詞を削除し、座談会で話され

た語の共起ネットワーク分析の結果を図1に示す。共起ネットワークでは、結びつきの特に強い（同じ文で語られやすい＝共起しやすい）語同士を線で結んでいって作成されるものである。頻出語ほど大きな円で描画され、また繋がりが強いほど円と円を繋ぐ線が太くなっている。

「座談会」の上位40語の共起ネットワークでは語は14のグループに分かれた（図1）。最も大きなグループには、11語が含まれた。「自分らしさ」「学校」「楽」「趣味」などの語が同じ話題の中で語られることが多いことがわかる。次に大きなグループは9語から成り、「参加」、「居場所」、「当事者」、「振り返る」などの語が見られ、これらの語も強い繋がりがあり、同じ話題の中で語られることが多いことがわかる。さらに「定型」、「発達」、「障害」、「個性」のような7語から成るグループが続く。また「自分らしく」と「生きる」と「大丈夫」、「最終」と「出す」、「配慮」と「就労」、「参加」と「当事者」などの間の線は特に太く、より強い共起関係であることがわかる。

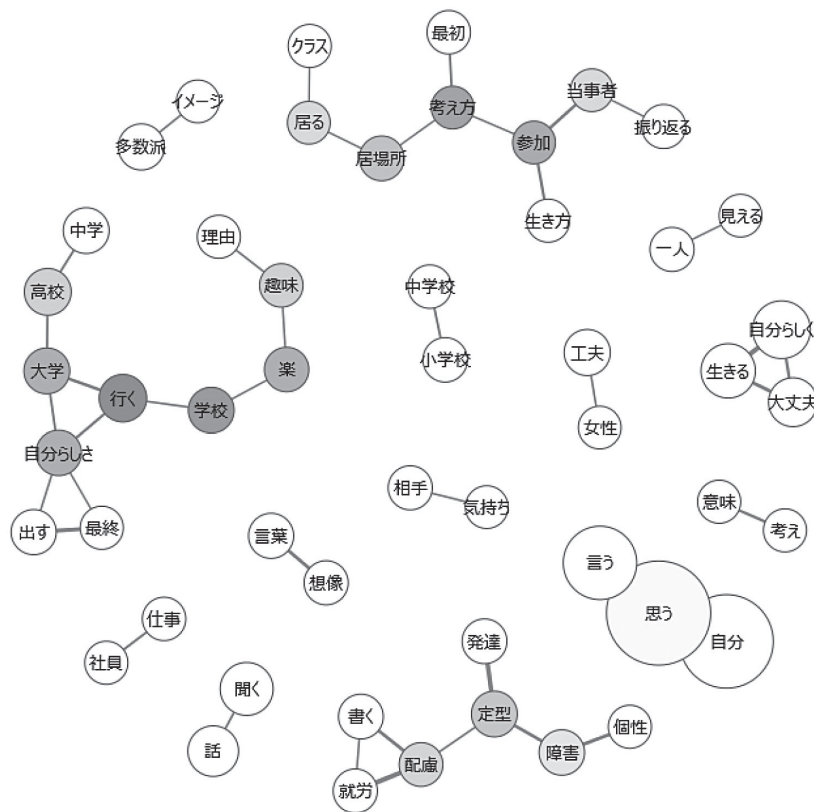


図1 座談会の共起ネットワーク

次に語の出現の仕方の全体的傾向を把握するために、出現語の多次元尺度法による分析を実施した。結果を図2に示す。出現語は解釈可能性から3つのクラスターに分けることが可能であったため、図に線を挿入した。より近い使われ方をしている語が近くに配置されるように示された図であるが、後述するように解釈のためには随時KH CoderのKWICコンコードダンスのコマンドを用い、どのような文脈で用いられたか探る必要がある。例えば、真ん中右上地点（図2中、I）に「自分らしく」という語とその近くに「大丈夫」という語があるが、この語が出現した文脈を上記の手法で探ると、「自分らしく」生きて「大丈夫」だと思ふ参加者と、「大丈夫」だとは思わない（思っていない）という参加者と、異なる意見が表現されていた。

クラスターIでは、「自分らしく」「生きる」「好き」「楽」「趣味」「居場所」「支援」などの言葉が分類され、近い位置にまとまっていることがわかる。参加者たちが自分らしく生きることを、自分の趣味や好きなことから、あるいは相談できる相手（家族や支援者、当事者同士など）と共に考えていることがうかがえる。クラスターIIでは、「自分らしさ」「女性」「仕事」「擬態」「相手」「見せる」などの言葉が比較的バラバラに配置されており、特徴的に大きな円で描かれた（多く語られた）語は見つけづらい。外に向けて見せている、表現している自分についての言葉が並ぶ傾向にある。今回の座談会の中では、「女性」と

して生きることの工夫よりも、「(女性としても含む)人間として」周囲にそのままの自分の姿を見せながら生きていくか、についての話題が中心となったため、「女性」という語を取り巻いて特徴的に語られるまでには至らなかったのであろう。クラスターⅢについては、「普通」「周り」を取り囲むように「小学校」「学校」「高校」などの言葉が配置され、少し離れて「定型」「障害」「個性」「多数派」「受け入れる」「疲れる」などの言葉がある。これまでの社会生活、とりわけ学校生活の中で、多数派である周りを意識し、自身の障害や感覚と付き合いながら頑張ってきたことがうかがえる。

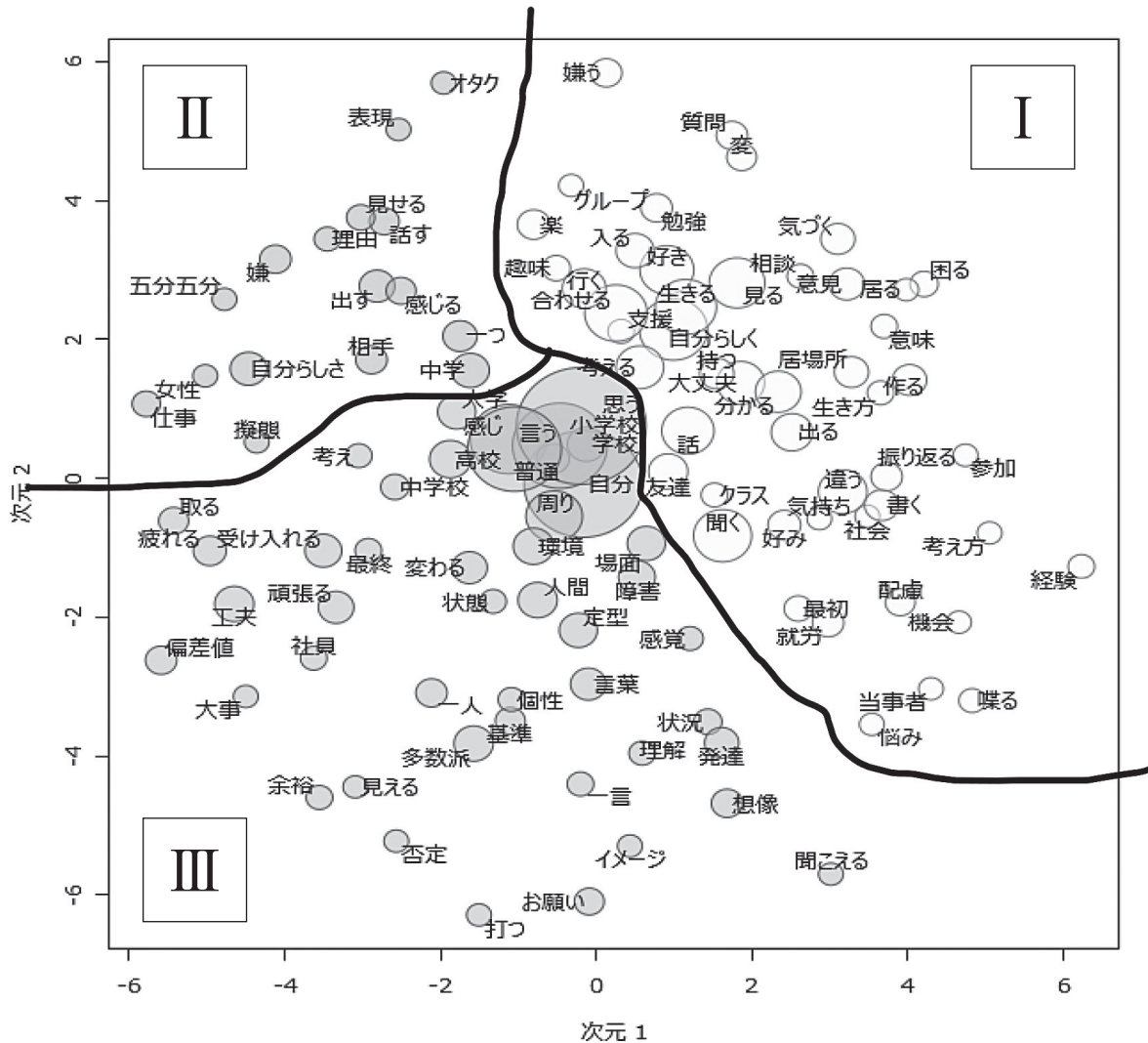


図2 多次元尺度法による図

(※クラスターごとに分ける線およびⅠ～Ⅲは岩男が記入)

本座談会は「前半：普通について」、「後半：自分らしく生きることについて」、「まとめとして：世間の人たちへ伝えたいメッセージ」の3部構成で進めた。そこでさらに詳細に、それぞれの場面でどのような語が特徴的に語られたかを探るため、「部(前半・後半・まとめとして)」を外部変数とした対応分析を行った。その結果を図3に示す。より多く語られた語の円が大きくなるように設定している。KH CoderのKWICコンコーダンスのコマンドを用い、どのような文脈で用いられたか探りながら、結果について述べていく。

前半の「普通」についてそれぞれが語った中では、「周り」、「見る」、「疲れる」などの語が出現しており、「多数派」や「偏差値」などの語も出現している。語られた内容をKWICコンコーダンスのコマンドで確認すると、「普通っていうと定型発達の人を想像する」「普通っていわゆる多数派になる人たち」というように社会の中で多数派になる人や定型発達の人をあげて「普通」の人として意識する語りが一方で、「普通って自分の中にそれぞれの基準がある」「それぞれのもつ普通の基準から外れた時に普通じゃないってなる」というように普通の基準は各々の中にある、といった語りもあった。あるいは、何かを表現する際に

は「自分の思う、『これ普通なのかな?』っていう一瞬の審査を経るから発表するまでの時間がかかる」といった語りや、自分が好きだと思うものが他の人からみるとどうか考えすぎて何も可愛いと思えなくなる、といった語りもあった。さらにこうした振る舞いが当たり前になりすぎて、心身の疲れにも気づきづらくなることも同じ文脈の中で語られていた。

後半の「自分らしく」生きることについてそれぞれが語った中では、「合わせる」も出現するものの「生き方」、「支援」、「環境」や「居場所」、「当事者」などの語も出現していることがわかる。語られた内容をKWICコンコーダンスのコマンドで確認すると、ある環境の中で「何かを選択するとき、一つの自分が持っていた能力というか自分らしさを捨てなきゃいけない」と語る参加者がいた。一方で「自分らしく生きて大丈夫っていうよりは、最終的に自分らしさをだしておかないと(まずい)」というものもあった。さらにこうした自分らしさについては、「ガールの集い」も含む当事者の活動に参加する中で、あるいは居場所と思える場が見つかり、そこでは「自分らしさ」を出すことができる、この座談会の中で自分らしく生きて大丈夫と思うように意見が変わってきた、というように当事者同士での関わりに参加する中で自らの生き方を振り返る経験をしてきたことについても語られていた。

さらに図3をみると、「普通」に関しては「小学校」と共に語られやすく、同じ学校についての語りの中でも「大学」に関しては「自分らしさ」とともに語られていることがわかる。そして「社員」のようなアルバイトや仕事に関わる段階となると、再び「普通」とともに語られやすくなる。ライフステージによる変化もうかがえる結果であった。

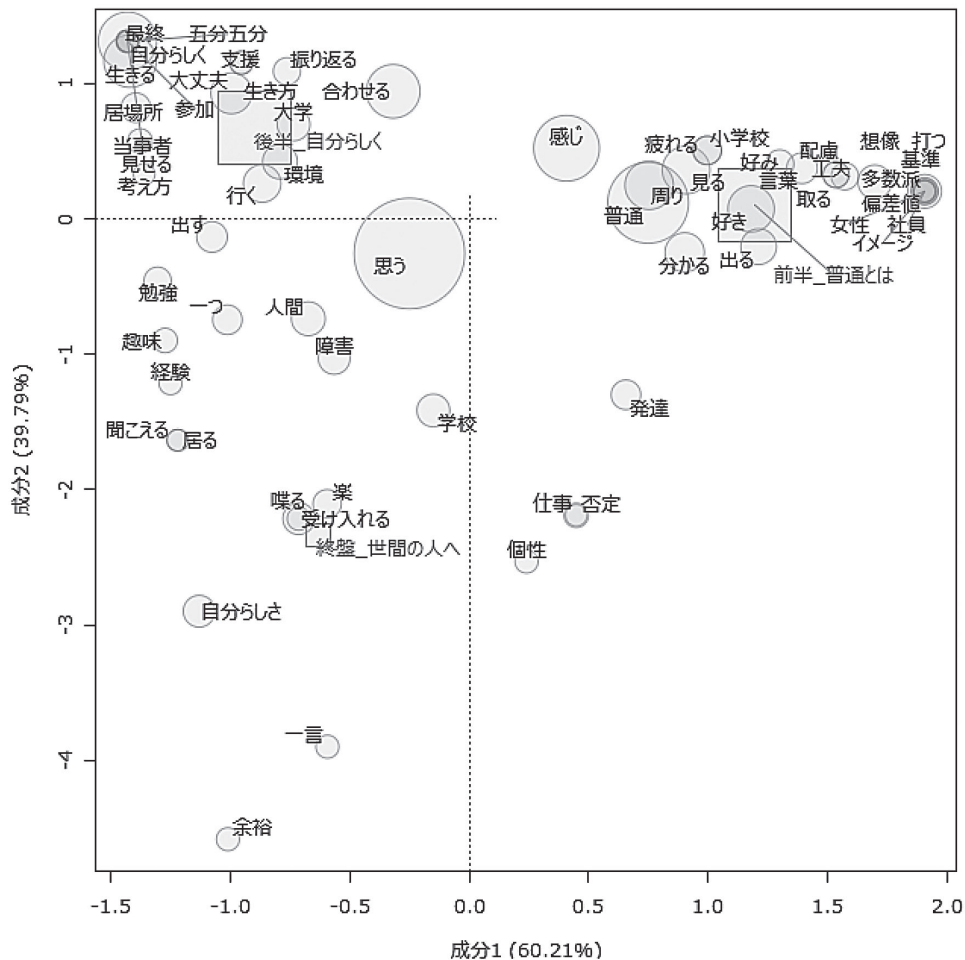


図3 対応分析から見る座談会3部構成の特徴

#### 4. 考察

##### 4-1 語りの分析より『普通』と『自分らしさ』について

本座談会は、主に2つの視点で進行した。1つは「普通」について、2つは「自分らしさ」についてで

あった。まずこの点について考察する。

#### 4-1-1 「普通」について

結果3-2より、「普通」について語られたのは、主に前半部分であった。参加者の語りによると、個人差はあるものの成長発達の早い段階（小学校・中学校）において、どこか自分自身が「普通」とは異なることに気づいており、「普通」と合わせる戦略をとるか、自分を貫く戦略をとるかはそれぞれ異なるものの、「普通」ということに対して強く意識を向けていたことがわかる。

図1の共起ネットワーク図をみると、「話-聞く」、「相手-気持ち」、「意味-考え」、「言葉-想像」といった関係性が共起しており、女性ASD当事者である参加者が、相手の気持ちを考えながら他者の話を聴き、自ら発信するときにも言葉の意味を考えながら表現する行動パターンが見受けられる。しかし図3に示す対応分析結果とその内容をKWICコンコーダンスで確認したところ、絶え間なくこうした行動パターンを続けることは、非常に「疲れる」ことにもつながっている。加えて、この行動パターンが当たり前になりすぎて、彼女たち自身も、当然のことながら周囲も、無理に努力していることに気づきづらくなるという過程が生じやすいと考えられる。

#### 4-1-2 「自分らしさ」について

続いて「自分らしく-生きる-大丈夫」の共起する関係性から検討していく。表2に記載のQ4に基づいて「自分らしさ」について話してもらったが、特に年長者は「自分らしく」生きていく必要性を強く感じていることが伺われた。それは、「自分らしさ」を抑えこみ「普通」に合わせる生活を青年期に至るまで続けた結果、心身不調や「自分らしさ」の混乱が強くなったため、主体的に自己選択したと考えられる。一方で、就職に向けた活動をしている参加者では、「自分らしく」よりも「普通」に合わせていく必要性を強く感じると語っていた。新たな人間関係、新たな環境や文化に入っていく際にはまた、その環境における「普通」はなにかを意識する機会が非常に増えるだけでなく、環境が変化するたびに、新たなスキルを身につけることに多大なエネルギーを注ぐ必要があることも推察された。

さらに座談会を進めていく中で、「自分らしさ」を出す相手や場面、環境についても振り返り、自分らしい「好き」についても、話す相手や状況を選択していることが伺われた。具体的には、自分が「一番好き」だが、年代が古すぎたりコアすぎたりして周囲に話しても理解されづらい話題ではなく、ある程度自分も楽しめて、周囲の人とも共通理解できる範囲の話題で人のおしゃべりを楽しむことがある。コアな内容について話したくなったら、SNSを通して、コアな話題を語れるコミュニティ、「好き」を共有できる存在を求められることができるということであった。

### 4-2 座談会を通して見えた社会的カモフラージュの功罪

次に、座談会を通して見えてきた社会的カモフラージュの功罪について考察する。

#### 4-2-1 【功】の側面

まず、【功】についてであるが、社会的カモフラージュを続けてきた結果として、時に自分らしくあり、時に周囲に合わせる、そのどちらの振舞いも可能なスキルを獲得したということがあげられる。このことの大きなメリットは、社会の中で、ともに過ごしたいと本人が思った相手=パートナーと、空間や時間を共有する選択がより主体的に自由に進めることができることである。

しかし、今回座談会に参加してくれた女性ASD当事者の現状を考慮すると、こうした自由度の高い社会的カモフラージュは、もしかしたら診断告知や専門的支援を受けていたり、自己理解が深まっていたりするから可能になっているのかもしれない。あるいは青年期になって、学校という束縛された世界から、社会という自分の価値観で過ごせる時間・空間・人間関係という環境を自己決定することができる中で、ようやく可能になってきたことなのかもしれない。

#### 4-2-2 【罪】の側面

そうでない場合、【罪】=デメリットの大きい、過剰適応としての社会的カモフラージュを繰り返す可能性がある。つまり、①過剰に周囲に合わせすぎて、その努力のわりに周囲にわかってもらいづらいこと、②



「自分らしさ」をめぐる混乱が生じることである。社会的カモフラージュ方略を一切取らず、周囲と合わせることを選択せず、こだわり行動のように「自分らしさを貫く」方略を続けることは、周囲から敬遠されるリスクを高める。しかし、「合わせる」方略を取り続けることは、「自分らしさ」が自分でもわからなくなるリスクや、実態として「困っている」にもかかわらず、そのことが周囲に伝わりづらくなってしまいうリスクを高める。その結果として、外界への恐怖から迫害感を強くすること、自己否定の傾向が強くなるのが最も大きいリスクといえるだろう。そこに、感覚過敏の影響が強くなると、社交不安や抑うつ感が高くなり、内在化障害に至るリスクも高くなる。

#### 4-3 的確な支援について

以上を踏まえると、社会的カモフラージュを視野に入れた的確な支援として、次の点が示唆される。つまり、社会の中で、ともに過ごしたいと本人が思った相手＝パートナーと、空間や時間を共有する選択を、より主体的に自由に進めることができるためのスキルについては、ライフステージに応じて具体的に伝える。そして同時に、女性ASDが日常的に社会的カモフラージュを行おうと努力し続けていることに留意する。加えて、「自分らしさ」を十分に発揮することができる機会と環境を本人と共に探し続けることが、重要である。

#### 4-4 座談会における語り方

最後に、この座談会における参加者の語り方について論じる。休憩をはさんで3時間に及ぶ座談会であったが、内容からもわかるように、参加者一人ひとりが率直に自らの体験や思いを表現してくれた。参加者はそれぞれが異なる人間であるため、お互いに共感しながらも、実に「異なる」意見がでてきた。

これは当たり前のように見えるが、実際には周囲に同調する（assimilation）というサバイバル方略で生活してきた参加者も多い中で、「異なる」意見で表現できたという意味で驚くべきことである。本グループも5年を経過し、特に長期参加している参加者においては、関係性も深まっていることは確かである（木谷ら、2020）。それでも、この場でも無理なカモフラージュが生じ、自分の意見を抑え込んで周囲にassimilateするというには十分な留意が必要であった。それは、彼女たちがともにお互いが心地よい時間と空間を過ごしたいと考えるからこそ、衝突を避けるために座談会の流れや他の参加者が先に話した意見とは異なる意見を出さないという選択をする可能性もありうるからである。

座談会における参加者の語り口調には、社会的カモフラージュの【功】があらわれていたと考える。例えば「ちょっと違うんだけどね」、「私の場合だと」、「●●さんと重なるところもあって」、「さっき●●ちゃんが言ってくれたところから考えたんだけど」と、何か意見や考えや思いを伝える際には、こうしたフレーズが意識的、あるいは無意識的に多用され、参加者同士で表現されたものを丁寧に受け取り、コミュニケーションする様子が見受けられた。特に年長参加者では、こうした「表現」の達者さが際立っていた。これまで他者と接するとき、思いが正しく伝わるように、そして他者の意見をなるべく齟齬なく受け止めるために、表現を磨いてきたことが伺えた。また年長者の語りをうけて、少し年少の参加者が自らの考えを深めたり、広げたりする様子があった。これも他者の考えに対して一度受け入れて振り返る行動であるように見受けられた。

#### 4-5 座談会を通して見えた「社会」

まとめにかえて、本座談会を通して見えてきた彼女たちにとっての「社会」について検討する。

Willeyは、「（社会に出て）その場その場の状況に応じて、自分本来の姿はなるべく隠さなくてはならないことは理解していた」、一方で、「（大学時代）ヒトとのつき合い方を学ぶのは、勉強と同じだった。外国語を学ぶのと同様、研究し、観察しなければならないのだから」と述べている。今回の女性ASDたちのナラティブ分析からは、個人差はあるもののWilleyが指摘した大学時代よりも早い段階から、「普通」を意識し、周囲に合わせるための意識的・無意識的努力を重ねてきている参加者も多いことが明らかになった。この結果からも、社会的カモフラージュは、青年期以前から長期的にみられる行動特徴であることが伺える。

周囲の大人は、彼女たちが自閉的な行動をコントロールし、一見わからなくなったということを単に歓迎するのではなく、彼女たちが何かしらの環境を「（何か一つを）選択するとき、一つの自分が持っていた能力という自分らしさを捨てなきゃいけない」と感じているかもしれないことや、社会に対して「あなたたちの普通に、私を矯正しないでほしい」という思いをもっている可能性について忘れてはならない。

## 付記

今回の報告は、科学研究費補助金（科研番号：20K03461, 研究代表者：木谷秀勝）による調査研究の一部である。本調査研究の実施にあたっては、個人情報の保護や学会発表・論文化に際しては保護者及び参加者自身に文書で承諾を得た。今回の座談会に参加してくれた女性当事者と、ご協力いただいた福岡市自閉症児者親の会高機能部会「たんぽぽ」会長小田陽子氏を初めとしたご家族の皆様にご感謝申し上げます。

## 文献

- Bargiela, S., Steward, R. & Mandy, W. (2016). The Experiences of Late-diagnosed Women with Autism Spectrum Conditions: An Investigation of the Female Autism Phenotype. *Journal of Autism and Developmental Disorder*, 46, 3281-3294.
- Head, AM, McGillivray, JA, Stokes, MA. (2014) . Gender differences in emotionality and sociability in children with autism spectrum disorders. *Molecular Autism*, 5:19.
- 樋口耕一 (2020) : 社会調査のための計量テキスト分析 内容分析の継承と発展を目指して (第2版) . ナカニシヤ出版
- Hull, L., Petrides, KV, Allison, C., Smith, P., Baron-Cohen, S., Lai, M., Mandy, W. (2017) . “Putting on My Best Normal” : Social Camouflaging in Adults with Autism Spectrum Conditions. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 47(8), 2519-2534. <https://doi.org/10.1007/s10803-017-3166-5>.
- Hull, L., Petrides, KV, Mandy, W. (2020) . The Female Autism Phenotype and Camouflaging: a Narrative Review. *Review Journal of Autism and Developmental Disorders*.7, 306-317. <https://doi.org/10.1007/s40489-020-00197-9>.
- 木谷秀勝・岩男英美 (2019) : 楽しむことをベースとした「アスペガールの集い」. 川上ちひろ・木谷秀勝 編著 (2019) : 発達障害のある女の子・女性の支援—「自分らしく生きる」ための「からだ・こころ・関係性」のサポート. 156-163. 金子書房.
- 木谷秀勝・岩男英美・豊丹生啓子・土橋悠加・牛見明日香・飯田潤子 (2020) : 青年期の女性ASDへの「自己理解」プログラムにおける変化—「カモフラージュ」から開放される居場所—. 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, 50, 171-180.
- Mandy, W., Chilvers, R., Chowdhury, U., Salter, G., Seigal, A., Skuse, D. (2012) . Sex Differences in Autism Spectrum Disorder: Evidence from a Large Sample of Children and Adolescents. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 42:1304-1313.
- Schneid, I., Raz, AE. (2020) . The mask of autism: Social camouflaging and impression management as coping/normalization from the perspectives of autistic adults. *Social Science & Medicine*, 248, 112826.
- Willy, LH. (1999) . *Pretending to be Normal; Living with Asperger's Syndrome*. Jessica Kingsley Publisher. ニキ・リンコ訳. (2002) . *アスペルガー的人生*. 東京書籍.